

Vol.1

フランス



東嶋和子の

Energy満タン!

世界紀行



Vol.1

フランス

東嶋和子 Wako Tojima

科学ジャーナリスト・青山学院大学非常勤講師

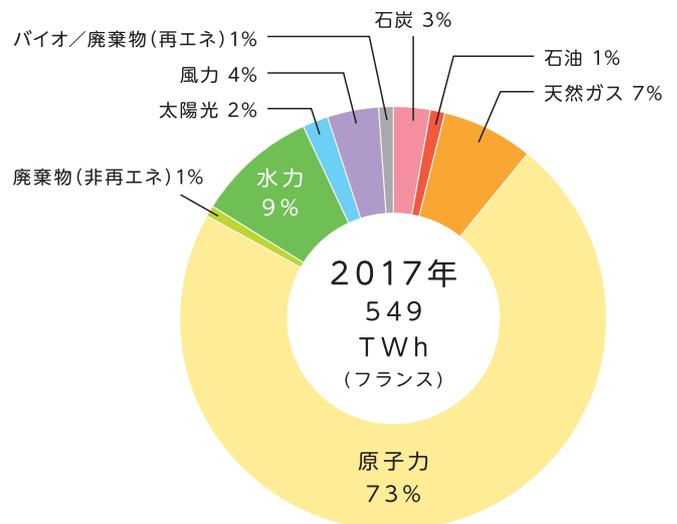
2021年11月、英国のグラスゴーで国連気候変動枠組み条約第26回締約国会議(COP26)が開かれました。2015年のCOP21で採択されたパリ協定の内容を具体化し、世界がひとつになって気候変動に立ち向かう機運を盛り上げました。会議開催中の9日、フランスのマクロン大統領はテレビ演説をおこない、「原子力発電所の新設を再開する」と表明しました。読売新聞パリ特派員電によると、エネルギー政策の自立性を高めることや気候変動への対応が狙い、とのこと。「2050年までに温室効果ガスの排出量を実質ゼロとする目標を達成するため」に加え、「エネルギーを他国に依存しないことの重要性も指摘した」と伝えています。フランスでは、古い発電所を閉鎖する一方、2007年に「欧州加圧水型炉」と呼ばれる次世代型の原子力発電所1基の建設が始まったのを最後に、新規着工はありませんでした。今回の決定は、科学的、合理的かつ柔軟なフランスのエネルギー政策を象徴する動きといえるでしょう。

日本同様、資源に乏しいフランスは、1973年の石油危機以来、自国のエネルギー源として原子力発電の開発に力を入れてきました。その結果、1970年代初めには20%だったエネルギー自給率が53%まで上がりました(2017年)。現在、フランスは米国に次いで運転基数が世界2位の原子力発電国。総発電量に占める原子力の比率は73%(2017年)で、世界1位です。ちなみにフランスは、一人当たりの二酸化炭素排出量が少ない国の一つでもあります。発電時に二酸化炭素を出さない原子力発電は、再生可能エネルギー同様、地球温暖化対策として有効とされています。

また、原子力発電は火力発電より安いので、フランスは、欧州では電気料金が安い国の一つでもあります。欧州では、天然ガス価格などの高騰にともない、電気代やガス代が値上がりしています。日本でもこのところ原油価格の高騰が家計を直撃しており、他人事ではありません。

裏面に続く →

● 発電電力量構成 (2017年)



(出所) World Energy Balances 2018 extended edition database, IEA
(出典) 平成30年度国際エネルギー情勢調査

フランスといえばシャンゼリゼ、ルーブル美術館、モンサンミッシェル、それに料理とワイン、ファッションなどが頭に浮かびますが、科学ジャーナリストの私にとっては、科学技術大国。フランスには、科学技術に関する大規模プロジェクトが数多くあります。原子力技術は、国を代表するテクノロジーのひとつです。

余談ですが、放射能の単位ベクレルは、19世紀に放射線を発見したフランスのアンリ・ベクレルの名をとっています。また、フランス人のピエールと結婚し、ノーベル賞を二度受賞したポーランド出身のマリー・キュリーは放射線をフランスの地で研究しました。

さて、2004年、南仏カダラッシュにある国際熱核融合実験炉(ITER)の候補地を訪ねた時のこととお話ししましょう。驚いたことに、校外教育として核融合のしくみを地元の子供たちに教えようと、家庭にあるホースや照明器具を材料に、研究者らがせっせと核融合炉のモデルを手作りしていました。パリの国立科学産業博物館では、「ソレイユ(太陽)」と題する展示がありました。ストーンヘンジから始まり、民話や太陽暦、太陽光発電など、太陽にまつわるさまざまな展示が並び、「大トリ」に核融合炉が登場します。「太陽で起きている核融合反応を地上に再現したのが核融合炉です」。専門家が子供たちに説明しています。ITERの誘致には、カダラッシュと青森県六ヶ所村が名乗りを上げていたのですが、プロジェクトの内容とともに、日本との誘致競争まで紹介していたのには感心しました。自国の科学技術の高さに対する誇りと科学教育への熱意をひしひしと感じたものです。

最後に、ある発電所での笑い話を一つ。1980~85年に6基の運転を開始したグラブリーヌ原子力発電所を訪ねた時です。なんと、構内に入る前の着替えの段階で管制コンピュータに不具合が発生。担当者が昼休みを終えて戻るまで、ゲートの前で下着姿のまま待たされる、というハプニングがありました。結局見学は中止、ワインでランチに舌鼓を打つ、というフランス式おもてなしにあいなりました。



●資料出典

『2021世界の原子力発電開発の動向』日本原子力産業協会
『平成30年度国際エネルギー情勢調査(諸外国のエネルギー政策動向及び国際エネルギー統計等調査事業)』
『諸外国のエネルギー政策動向に関する調査報告書』経済産業省資源エネルギー庁委託調査|日本エネルギー経済研究所
『みんなの知らない世界の原子力』海外電力調査会編著、日本電気協会新聞部発行

PROFILE

東嶋和子 とうじまわこ / 科学ジャーナリスト・青山学院大学非常勤講師

筑波大学卒。在学中、米国カンザス大学に文部省交換留学。読売新聞社科学部記者を経て独立。「いのち」をキーワードに科学と社会の関わりを追っている。主な著書に『水も過ぎれば毒になる 新・養生訓』『人体再生に挑む』『放射線利用の基礎知識』『死因事典』など。外務省外交フォーラム外務大臣賞、原子力学会社会・環境部会優秀活動賞受賞

